

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01035

研究課題名（和文）宋代社会における多層且つ複合的な士大夫ネットワークの研究

研究課題名（英文）A study of multi-layered and compound shidafu network in Song society

研究代表者

平田 茂樹（HIRATA, SHIGEKI）

大阪公立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90228784

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：宋代士大夫の書信を手掛かりにネットワークとコミュニケーションを検討し、以下のことを明らかにした。（1）宋代士大夫は血縁、地縁を基礎とする基層社会、その上に存在する「中央」「路」「州」「県」などの各層において、異なるネットワークを駆使しながら交流を行っている。（2）彼らの交流は直接的な交流以外に書信を通じた交流手段が重要な方法として用いられたが、「書」と「啓」が数量的に圧倒的に占めている。（3）前者が公的、私的両面で用いられる一方、「啓」は儀礼的な挨拶状的性格が強く、士大夫に世界の交流の潤滑油的機能を有している。（4）両者からは当時の士大夫の共通した所謂「集合心性」を読み取ることもできる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国社会はネットワーク型の社会として知られている。本研究は宋代という過去の時代ではあるが、士大夫というエリート階層が手紙を介してどのように交流し、ネットワークを構築していたかを考察している。本研究は、現代の中国社会を歴史的アプローチによって解き明かすうえで重要な情報を提供するのみならず、手紙をネットワークやコミュニケーションと結び付けた研究成果は稀少であり、新たな研究の地平を切り開くものでもある。

研究成果の概要（英文）：Using the letters of Song dynasty elites as clues, this study examines their networks and communication and reveals the following. (1) The elites of the Song dynasty used different networks to communicate with each other at different levels of society, such as central, "road," "state," and "prefecture," which existed above the base society based on blood and land ties. (2) In addition to direct exchanges, they also used letters as an important means of communication, with "Shu書" and "Qi啓" dominating in terms of quantity. (3) While the former was used both publicly and privately, the "Qi" was more like a ceremonial greeting and functioned as a lubricant for the elites. (4) From both of them, we can also read the so-called "collective spirit" common to the elites of the time.

研究分野：中国史

キーワード：書信 交流 士大夫 公と私 読書共同体 集合心性

1. 研究開始当初の背景

宋代士大夫のネットワークについては、政治的ネットワーク、地縁・血縁的ネットワーク(家族・宗族)、思想・文学に関するネットワーク、交遊圏など異なる視角より研究が進められてきた。が正史、実録系史料、が墓誌銘、行状、が手紙や詩文、が日記、書信(以下、手紙の語を用いる)、題跋、序、記というように、使用史料に異なりが見られる。1980年代、アメリカの Robert Hymes が墓誌銘を主たる史料を用い、士大夫の婚姻圏や社会活動を分析し、北宋の中央指向型の士大夫から南宋の地域社会密着型の士大夫へ展開するという大きな図式を提示し、その後長らく大きな影響を与えてきた。近年、文集所載の各種史料の検討が行われ、からにわたる様々なネットワークが存在し、地方社会から全国に及び各階層間に様々なネットワークが存在していることが明らかになってきている。本研究は、からに関わる史料を網羅的に掲載する宋代の文集を調査することにより多層且つ複合的な士大夫ネットワークを明らかにすることを目指している。

2. 研究の目的

従来の宋代士大夫のネットワーク研究が、政治、文化、学問等のネットワークや交遊圏など異なる関心に沿って進められ、異なる成果を生んできたのに対し、本研究はこれら異なるネットワークを統合するとともに、「交遊空間」「移動」の視点を導入することにより、当時のネットワークの実態解明を目指していく。とりわけ手紙を主たる分析史料として用いながら、当時の士大夫が「中央」「路」「州」「県」、さらには郷里社会などにおいてどのようなネットワークを用い、どのように交流をしていたのか、その中においてどのような差異が存在しているのか、手紙が当時の官僚システムや士大夫文化とどのように関わり、彼らの活動を支えていたのかなどを明らかにする。

3. 研究の方法

当初は北宋士大夫の手紙を通してうかがえるネットワークとコミュニケーションの分析を行い、後半において南宋士大夫に関する当該課題を分析し、最終的に宋代士大夫のネットワークとコミュニケーションについての特徴を明らかにすることを予定していた。

ただ、研究を進める段階において東英寿氏らの宋代文学者と研究交流をする中で、南宋士大夫に絞って研究を進めることとした。というのは、東英寿氏のグループは北宋士大夫の手紙を手掛かりに当該テーマの研究を進めており、彼らの研究を取り入れながら研究を進めることに方向の修正を行った。この共同研究はその後、東永寿氏代表、科学研究費補助金基盤研究(B)「宋代書簡に関する総合的研究」(2022-2026)という形を取って進めることとなり、筆者も研究分担者として加わっている。

4. 研究成果

この5年間に以下のような成果(著書・論文)を得た。

著書

平田茂樹・余蔚共編『史料與場域：遼宋金元史的文獻拓展與空間體驗』(上海人民出版社、2021年)

平田茂樹『宋代政治的空間与結構：科学社会的人際網絡研究』(浙江古籍出版社、2022年)

平田茂樹・山口智哉・小林隆道・梅村尚樹共編『宋代とは何か?』(勉誠出版、2022年)

論文

平田茂樹「史料と研究視角との間——宋代ネットワーク研究の現状を振り返って——」(『大阪市立大学東洋史論叢』19、2019年)

平田茂樹「南宋士大夫「重層」且「複合」的網絡與交流——以崔與之所謂「書信」的材料為線索——」(『宋学研究』2、中華書局、2020年)

平田茂樹「在史料與研究視角之間——宋代社會網絡研究現狀的回顧」(『史料與場域：遼宋金元史的文獻拓展與空間體驗』(上海人民出版社、2021年)

平田茂樹「南宋社會士大夫の多重網絡空間——以書信材料為線索」(『国学研究』45、中華書局、2021年)

平田茂樹「南宋士大夫劉克莊的交遊空間与社会網絡」(『大阪公立大学東洋史論叢』22、2022年)

平田茂樹「宋代の「啓」再考——劉克莊の文集を手掛かりとして」(『大阪公立大学東洋史論叢』23、2023年)

この5年間はそれ以前の科学研究費基盤研究(C)「宋代手紙資料から見た政治的ネットワークとコミュニケーションに関する研究」(2015-2018)を受ける形で、手紙資料を用いながら宋代士大夫のネットワークとコミュニケーションについて研究を進めた。この間、取り扱ったのは魏了翁、呉泳、洪咨夔、崔與之、劉克莊の5名の手紙であり、いずれも南宋後半期において政治家、文学者、思想家として活躍した人々である。この5名のケーススタディ

を通して次のような成果を得た。

1. 宋代ネットワーク研究と交遊研究の視座

多層的・複合的な社会結合とは次のように考えている。宋代地域社会の士大夫研究は、婚姻ネットワークを中心に進められることが多かったが、その政治、社会、学問、文化などの諸活動やネットワークを検討することを通じて、local history から regional history(「広域」的な地域社会)へと目を向ける研究視角が出されるようになってきている。すなわち、かつての地域社会史研究は一つの「州」を対象とするものが多かったが、近年の幾多の成果は、幾つもの州をまたがる地域、あるいは「路」を対象とするより広域的なものへと変化して来ている。また、道学のネットワークについても、全国的な学問ネットワーク「広域講学」と特定の地域の学問ネットワーク「地域講学」の二つの類型があったことが指摘されている。以上については陳松「分権統治下における在地社会と広域地方 - 宋代四川を中心として -」(伊原弘・市来津由彦・須江隆編『中国宋代の地域像 比較史からみた専制国家と地域』(岩田書店、2013年)及び市来津由彦『朱熹門人集団形成の研究』(創文社、2002年)に詳しく述べられている。ここで言う「多層」とは「家族」、郷村・県・州・路といった各層をなす「地方社会」、さらには首都を中心とした「中央社会」といった多層の空間的な層が存在しており、これらの空間においては、政治的ネットワーク、家族・宗族ネットワーク、文学・思想ネットワーク、交遊圏などがそれぞれ独立して存在しているのではなく、「複合的」にネットワークが構成している。これらの各層の状況は様ではない。基層社会となる郷村は基本的に地縁、血縁が複合的に結びつく形でネットワーク社会が構成されるが、その上位となる県、州、路においてはこれらの「縁」に加えて、学縁、業縁あるいは宗教的關係などが深くかかわっていき、当然ながら政治的なネットワークが組み込まれていく。そしてさらに上位となる「中央」の世界においてはこれらの日常的なネットワークが基礎となりながら、政界での競争に勝ち抜くため、強い政治的ネットワークが形成され、士大夫の活動が展開することとなる。

宋代交遊研究については次の三点に留意する必要がある。第一が交遊の形態である。梁建国『朝堂之外：北宋東京士人交遊』では拜謁、走訪、宴飲、雅集、送別の五つの形態に目を向けている。また、「贈」という行為に目を向ける研究者も存在する。合山究「贈答品に関する詩にあらわれた宋代文人の趣味的交遊生活」(『中国文学論集』2, 1971年)において「文人趣味の勃興に伴って、士大夫間の交遊形態も従来とは様相を一変して、新しい独特の交遊絵巻を繰広げつつあった。その具体的な実例をいくつか挙げると、人との送別の餞(驢行)や誕生日のプレゼントに風雅な趣味品を贈る習慣が広まったのもその一つである」と宋代頃より盛んになる贈答品の応酬ネットワークを論じている。同論文で挙げられている贈答品は、文房四宝、茶、酒の肴、果実など多様なものを列挙するほか、蘇軾が流謫地において多様な贈物を受け、恵まれた生活を送っていたなども指摘されている。この「贈」の行為に関わる史料としては、詩や手紙があげられる。また、2017年のライデン大学の会議報告 Chen Wenyi 論文 When Confucian Scholars Beg: Informal, Voluntary, Collective Support in Song and Yuan Literati “Prefaces” では、ある一群の「序」に旅費や家屋購入のために金銭や様々な物の貸借を求める事例があることが紹介されている。

第二に留意すべきは交遊空間への視座である。梁建国『前掲書』においては、朝堂の外に存在する衙署、寺観、酒肆、茶坊などの公共空間や住宅、庭園などの私人空間に目を向けている。例えば北宋の首都開封の宅園において、士大夫が文学作品や骨董、美術品を鑑賞しながら交遊を行ったり、城門、園林、寺観、朝廷や役所などにおいて「送別」を行う風景が論じられている。また、この送別の場においては送別詩や「贈序」と呼ばれる文学作品が送られることともなる。すなわち、交遊空間については具体的な場所とともに、その場所にて交遊を演出する様々なモノについても目を向ける必要がある。

第三は、史料の特徴や機能をめぐるものである。従来の墓誌銘、行状、神道碑などの伝記資料に関わる史料を用いて研究を進めるものが多かったが、近年は日記、手紙、記、序、題跋など新たな史料を用いて研究が進められるようになってきている。こうした史料を用いて研究を行う際にはその史料がどのような特徴を持ち、どのように用いられたのか、史料の持つ機能を十分に踏まえて用いる必要がある。この点は次の「宋代の手紙の特徴」で述べる。

2. 宋代の手紙の特徴

宋代の手紙には「書」「啓」「状」「劄子」「帖」「簡」「尺牘」など各種の様式がある。各種の様式の特徴については李貴・張靈慧「論宋代手紙体類的消長与創新」『北京大学学报(哲学社会科学版)』59 5、2022年に端的にまとめられている。これらのうち、筆者が考察の対象としているのが「書」と「啓」である。なぜならば、現在『全宋文』には35000を超す手紙が残されているが、そのうち「書」と「啓」がそれぞれ14000前後を占めており、両系統の手紙の数が圧倒的に多いからである。

「書」と「啓」について概括すれば以下の通りとなる。

(1) 公文書と同じような機能を有する「書」。公文書が官司に送られるのに対し、この「書」は官僚個人へと送られ、具体的な意見や指示が記される。

(2) 「啓」。日常的な挨拶状に相当するもので、赴任の挨拶、昇進、推薦などへのお礼、誕生日の返礼など官僚や士大夫にとって交際の潤滑油的な役割を果たす。挨拶状という形式

のため、一種のテンプレートのような同様な表現を用いた「啓」が良くみられる。
(3)「書」。官僚・士大夫の「私的圏域」の中でやり取りをされるもので、政治、学問、趣味、生活上の様々なことについて意見交換が行われる。

以上の「書」と「啓」は単独でも用いられるが、その一方、公文書と「啓」「書」と連動して用いられるケースも多々あり、動態的視点より手紙をとらえる必要がある。

手紙の史料から、南宋士大夫の次のような交遊の様子が浮かび上がる。南宋の首都杭州に代表される所謂「政治の中心」の交遊と、周辺や縁辺の社会における交遊とはタイプを異にしている。呉泳の手紙の場合、首都における交遊の様子を示す手紙が比較的多く残されている。呉泳の周りには数多くの友人が存在しており、直接訪問して交遊できる環境に暮らしていた。その際に呉泳は手紙並びに手紙に付帯して送られてくる、上奏文の副本、文学作品や哲学作品を友人たちと一緒に回覧し、意見交換を行っている。手紙の背後に一種のサークルが存在し、その中で手紙は公開され、読まれ、意見交換される存在であったことが分かる。今日 SNS (社交ネットワークサービス) が流行しているが、何となくその雰囲気似ている。手紙は秘密性、個人性の高いものでありが、その一方、友人、知人などの集団内では公開性、公共性の高いものとして扱われている。

一方、魏了翁、洪咨夔の手紙は処罰を受け、官職から離れた閑居生活の中で書かれたものが多く残っている。この場合、「中心」から離れた周辺、縁辺にいたため、直接的交遊は少なく、手紙を介しての交流が頻繁に行われる。こちらの手紙にも文学作品、哲学作品が付帯されていることが多く、手紙とそれらを含めて意見交換が為されていく。宋代思想史研究においては、朱熹と弟子間の手紙の例が有名であるが、手紙は書院などの「講学」の場と同様な機能を持ったものと見做す研究者も存在している。また情報収集の重要な手段となっており、周辺、縁辺の地においてはより情報伝達の道具として使われると共に、手紙を介した広域ネットワークが展開していたことも見えてくる。

次に、手紙の交遊においては「速度」や「距離」にも目を向ける必要がある。魏了翁や呉泳の手紙には「通鋪」(所謂駅伝システム) を利用していると思われる表現が現れている。官僚であればこうした「通鋪」を利用し、比較的早く手紙のやり取りをしていたことが考えられる。その一方、友人、知人に手紙を託す事例もしばしば現れる。特に周辺、縁辺の社会に居住している場合、「速度」や「距離」、さらには手紙を仲介する「媒介人」の存在に目を向ける必要がある。この問題については曹家齊「宋代士人的私人通信與遊訪 立足於相關制度和社會背景之考察」(『中華文史論叢』, 2016 年 4 期)、顧宏義「宋人手紙傳遞方式與用時以朱熹與師友門人往來書札為例」(『河北大學學報(哲社版)』, 2018 年 5 期) が明確な見解を示している。前者によれば北宋仁宗頃より、士大夫は通鋪を通じて手紙を送ることが許されるようになる。後者によれば、手紙のやり取りには「通鋪」「專人」(配達を専門の運送者に依頼する)、「便人」(送付先を訪れる知人、友人などに委託する) の三つの方式があり、朱熹の手紙の場合、圧倒的に「便人」による方式が用いられている。

さらに手紙は士人の知識構築と深く関わってきており、手紙の中に登場してくる「蔵書楼」「書院」といった空間に目を向けていく必要がある。特に周辺、縁辺の社会に居住する士人にとって手紙は知識構築の上で重要な存在であったが、手紙に加えて上記のような存在をも考慮に加え、彼らの知識構築の問題を検討していく必要がある。具体的な事例として魏了翁の鶴山書院、洪咨夔の天目山の蔵書楼を検討したが、この蔵書楼から本を借り出す手紙に見られるように、蔵書楼を中心とした知的ネットワークが展開している様子をうかがうことができる。

3. 宋代士大夫のネットワークの特徴

宋代士大夫のネットワークの特徴を政治的ネットワークから見ていくと、次のように説明することが可能である。これまでの朋党研究は朋党内のネットワークや政策、政治意識について分析することが多く、朋党がどのように形成されていくのか、この問題について十分に検討されてこなかった。朋党ネットワークには次の二つのネットワークに目を向ける必要がある。一つは朋党の人々の日常的ネットワークが如何なるものであるのか、二つ目はそのネットワークがどのように政治的ネットワークに転換していくのか、という点である。前者の検討を進めていく中で血縁、地縁、学縁、業縁の各種ネットワークの検討が不可欠であり、また史料中に同姓、同郷、同学、同舎、同年、同官などの所謂「同」を紐帯とする様々な関係が存在し、彼らはその関係を取捨選択しながら政治的ネットワークを形成していく。後者の問題では宋代の「薦挙」の仕組みが重要となる。宋代の官僚の陞進は「資格」と「薦挙」の二つの仕組みになって行われ、官僚たちは陞進に当たっては絶えず、一定の官職の経歴(資格)と上司、高官からの推薦(薦挙)を必要としていた。そのため、日常的ネットワ

ークがこうした推薦の際に利用されていくこととなる。詰まるところ、朋党研究においては当然ながら彼らの政治意識や政策といった問題も重要であるが、彼らの背後に存在する「体系(システム)」「空間」「ネットワーク」といった要素にも目を向けることが必要となる。

魏了翁、呉泳、洪咨夔、崔與之、劉克莊の諸事例は、手紙の中で地縁、血縁、学縁、業縁の各種の「縁」の関係性が様々に結びついてネットワークを構成し、これらを強める働きをしているのが「薦拳」と呼ばれる人事の階梯において推薦者を必要とするシステムであり、強められた関係性が政治を中心とした世界で大きな機能を発揮している様子を読み取ることができる。例えば崔與之と呉泳、洪咨夔の間には、崔與之が四川制置使であった時に「幕府」を開き、呉泳、洪咨夔を自己の部下として「辟召」したことによる幕主 幕僚間の強い関係が存在している。これらの関係性はこの三人に留まるものではなく、少なくとも数十名に及ぶ関係性を史料から読み取ることができる。また魏了翁と呉泳は蜀学を伝授した「師生」の関係でもある。こうした関係と、魏了翁、游似、呉泳などが作っていた四川ネットワークとが交じり合い、広範な交遊が展開するとともに、政治的な関係をも作り出していたことが明らかとなった。これは特殊な事例ではなく、同様な状況は劉克莊を中心としたネットワークからも読み取ることができる。

4. 宋代の士大夫のネットワークとコミュニケーションから見る社会の特徴

宋代士大夫のネットワークとコミュニケーションについては上記の中で言及しているので、その背後に見える「集合心性」について触れておく。手紙を分析していくと、そこには当時の人々が共有した意識や心情を垣間見ることができる。これをアナル学派が用いた「集合心性」という概念を借りて用いながら述べておく。5名のケーススタディは南宋後半期の時代の人物であり、そこには共通した「集合心性」を読み取ることができる。その鍵となるのが「済王冤案」と「端平更化」である。この事件を説明すると以下の通りである。

南宋嘉定十七年(1224)閏八月、寧宗が崩御した。宰相史彌遠は皇子趙昀を擁立し、理宗が即位する。その結果、皇帝の即位争いに敗れた皇子趙竑は済陽郡王として湖州に流され、寶慶元年(1225)正月、湖州の潘壬らが済王を擁したクーデター(湖州の変)が勃発する。このクーデターはただちに鎮圧され、済王は殺されることとなる。この湖州の変をめぐる、朝廷内において済王の冤罪を主張する動きが現れ、この動きに同調した数多くの政治家たちは処罰もしくは左遷されることとなる。「済王冤案」は南宋後期に大きな影響を与え、この問題は長期にわたり、政治問題として取り上げられていく。

続いて専権宰相史彌遠が死去し、理宗の親政が開始される。この政治「端平更化」は、鄭清之が中心になって真徳秀、魏了翁などの人材を中央に集め政治を刷新したため、「小元祐」と称されている。具体的には『宋史』巻414 鄭清之傳に述べられているが、「済王冤案」と「端平更化」の両者に関わった人物は重複しており、また5名の手紙にはこの二つの事件に関わった人々との親密なやりとりが窺え、共有した政治意識を垣間見ることができる。

個別の結果は省略し、劉克莊の事例によって説明する。「端平」は「小元祐」と称されるが、劉克莊の手紙では次のような図式を読み取ることができる。劉克莊の手紙では「慶曆」「嘉祐」「元祐」の時期を理想的な時代としてとらえる記述が多出する。これらの時期の特徴としては「言路」(給事中、中書舎人、御史台官、諫官など)による言論活動が良く知られているが、劉克莊も政治における言路の官の活動を重要視しており、ほぼ同様な文脈を読み取ることができる。その裏返しとして、劉克莊は史彌遠専権体制の流れの中で、「梅花詩案」(寶慶三年(1227)に起こった「詩禍」。錢塘の書肆陳起が江湖詩人の詩を編纂した『江湖集』を出版するが、その中に「済王冤案」ならびに史彌遠専権を誇る内容が書かれていたとして多くの人々が処罰を受け、史彌遠の死まで「詩禁」が行われた)や「済王冤案」などによって弾劾を受けるが、これらの言論弾圧を同様な事件である、北宋の蘇舜欽の「進奏院獄」、蘇軾の「烏台詩案」になぞらえる形で述べている。

こうした意識は劉克莊にとどまるものではなく、少なくとも5名の手紙には共通して見えるものである。既に南宋人に「嘉祐」や「元祐」を理想的な政治の時期としてとらえる共通した意識が存在したとする研究が行われているが、南宋人の手紙からは彼らがこうした意識を共有し、それを手紙という手段を通して表現していたことが確認できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平田茂樹	4. 巻 22
2. 論文標題 南宋士大夫劉克莊の交游空間与社会網絡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋史論叢	6. 最初と最後の頁 53 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田茂樹	4. 巻 45
2. 論文標題 南宋社會士大夫の多重網絡空間 以書信材料為線索	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国学研究	6. 最初と最後の頁 135-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田茂樹	4. 巻 2
2. 論文標題 南宋士大夫「重層」且「複合」的網絡與交流 - 以崔與之所謂「書信」的材料為線索	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宋学研究	6. 最初と最後の頁 217-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田茂樹	4. 巻 無し
2. 論文標題 在史料與研究視角之間; 宋代社會網絡研究現狀的回顧	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史料與場域：遼宋金元史の文獻拓展與空間體驗	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田茂樹	4. 巻 19
2. 論文標題 史料と研究視角との間 宋代ネットワーク研究の現状を振り返って	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋史論叢	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平田茂樹	4. 巻 138
2. 論文標題 海外の宋代史研究の現状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 72-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 劉克莊の書信から見た「済王冤案」と「梅花詩案」
3. 学会等名 日本宋代文学学会第9回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 宋代政治像の再構築を目指して
3. 学会等名 宋代史談話会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 「濟王冤案」と「梅花詩案」 劉克莊の書信を手がかりとして
3. 学会等名 宋代史談話会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 南宋士大夫劉克莊の交遊圈與人際網絡
3. 学会等名 第二回大阪市立大学・広州大学学術交流会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 南宋士大夫“重層”且“複合”の網絡与交流：以崔与之所謂“書信”的材料為線索
3. 学会等名 東亜宋学国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 南宋士大夫“重層”且“複合”の網絡与交流：以崔与之所謂“書信”的材料為線索
3. 学会等名 信息溝通与国家秩序国際会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平田茂樹
2. 発表標題 南宋士大夫“重層”且“複合”の網絡与交流：以崔与之所謂“書信”的材料為線索
3. 学会等名 宋代文獻新視野：研究課題及方法の反省與前瞻國際研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

〔圖書〕 計3件

1. 著者名 平田茂樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 浙江古籍出版社	5. 総ページ数 379
3. 書名 宋代政治空間與結構－科举社会的“人際網絡”研究－	

1. 著者名 平田茂樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中西書局	5. 総ページ数 144
3. 書名 科学与官僚制	

1. 著者名 平田茂樹・余蔚	4. 発行年 2020年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 439
3. 書名 史料與場域：遼宋金元史の文獻拓展與空間體驗	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------